

は何ををかれても古美術品を蒐められた。先生の蒐められた作品の数は實に夥しいもので、それはひとり、日本、支那の作品を論ぜず、あらゆるものを蒐めてをかれたのである。

一方先生の手によつて國華俱樂部といふものが設けられ、美術學校以外の美術團體として其の興隆、發展について懇談的に盡されたものである。その俱樂部の所有であつた「伊香「保」樓」をあの大地震の前に圍柱會に譲り渡されたが、灰燼に歸する前に他人にゆづつたおかげで、株主にも迷惑をかけずに濟み、基本金を返済した殘金で、口演録を出版するなどの有益な事業をなされたのであつた。

これなども先生の徳の致すところであらうと考へてゐる。ましてあの大地震で燒失してしまつた古美術品の目録を作つてをかけた事は寔に尊い事だと思はれる。

その他先生については色々語りたし事は澤山あるのであるが、ともかくも、あらゆる美術方面に深い造詣と鑑識を持たれて、實際の上では、種々なる團體の會長をひき受けられるなど、あらゆるものを、一生を通じて獻身的に指導し、又行はれた事は全く感謝に堪えぬ次第である。

これらは全く先生の徳の然らしむるところであらう。

〔『美之國』第十六卷第四号。昭和十五年四月〕

⑨ 八田辰之助の起用

昭和十五年四月一日、八田辰之助が助教授（鍛金実習担当）として採用された。八田は明治三十八年二月八日香川県に生まれ、同県

立工芸学校金工科を経て本校金工科鍛金部に入學、昭和二年三月卒業して研究生となり、同六年三月に修了した。同八年から富山県立工芸學校教諭の職にあり、金工作家としては昭和六年の聖徳太子奉賛展出品、同八年の第十四回帝展入選（「真鍮線文華瓶」）、同九年第十五回帝展入選（「隴銀電氣スタンド」）などの業績があつた。長く軍籍にあり、昭和十五年現在陸軍歩兵中尉であつた。

⑩ 本校設置記念式

十月四日、本校設置記念式が挙行され、卒業生関係之助、石川巳七雄の講演があつた。

⑪ 『東京美術學校校友會誌』第十九号

昭和十五年十月、校友會は標題の機関誌を皇紀二千六百年、創立五十周年記念号として発行した。編集兼發行人は森田龜之助である。森田は前年の役員改選の際に會報編輯長となり、「公刊文藝雜誌の追隨に墮し、會報本來の意義を喪失せる『東京美術』を極力排斥し何處までも會報としての名實を永久的に存續せしめる」という主張のもとに雜誌を改題し、その体裁を『東京美術學校校友會月報』に近いかたちに戻し、時あたかも創立五十周年とあつて、學校の歴史を振り返つてみようという意図から、関係者の回想等を満載した記念号として編集、発行した。同誌の目次は次のとおりである。

皇紀二千六百年紀元節に賜りたる詔書

口絵

寒林枯葉 油絵（原色版）

久米桂一郎筆

大鷲の図 水墨（コロタイプ）

狩野 芳崖筆

厨 房 油絵

黒田 清輝筆

風景と牡丹 片切彫手板（素銅陰刻）

加納 夏雄作

濡獅子円額 青銅浮彫

大島 如雲作

牧 童 牙彫浮彫

石川 光明作

技 芸 天 木彫極彩色

竹内 久一作

男 の 首 青銅

長沼 守敬作

巻頭言「所感」

澤田 源一

本校沿革略記

西田 正秋（編）

学校創立当時回顧

六角 紫水（談）

岡倉天心の支那旅行に就いて

早崎 梗吉（談）

官立東京美術学校創立記

高屋 肖哲

橋本雅邦先生のこと

溝口禎次郎（談）

西洋画科新設当時回顧並に黒田清輝先生のこと

小林 万吾（談）

油画科創設当時

白瀧幾之助（談）

開校二十周年頃の追憶

南 薫造（談）

学校時代の思ひ出

新納忠之介（談）

竹内久一先生作神武天皇御像

香取 秀真

皇祖御立像製作の感想

故 竹内 久一（談）

学校創立五十周年記念に寄す

石川 確治（談）

図案科の回顧並に建築科のこと

大沢三之助

図案科想ひ出

小場 恒吉

回顧片々

廣川松五郎（談）

図画師範科創立当時の回顧

三尾与喜蔵（談）

加納夏雄先生の事

清水 亀蔵（談）

白岩山岩窟内壁画と陳和卿に就いて

堤 達男

校友会各部報

武道部（柔道部、剣道部、弓道部、乗馬部、射撃部）

体育部（庭球部、山岳部）

文芸部（茶道部、謡曲部、尺八部、短歌部、俳句部、音楽部、

映画部、舞台芸術部、写真部）

校友会人事部報告

生徒掛調査

昭和十四年度決算報告

校友会総務部

文庫彙報

文庫課

挿話集（口絵作品・門表文字・校紋・銅鐘・建築・新校旗・校歌・樹木の由来等）

編集委員

編集後記

同 右

挿図

本校旧校門と桜、岡倉先生銅像（庭内六角堂安置、平櫛田中作）、本校旧正面玄関、本校門標、本校本館玄関、本校工芸科建築一部、本校建築科煉瓦建、正木先生陶像（正木記念館内安置、沼田一雅作）、正木記念館、青銅時代（ロダン作、校庭）、鎌研ぐ奴隸（希臘後期、本館内）、ガッタメラタ騎馬像（ドナテルロ作、同）、コレオニ騎馬像（ヴェロッキオ作、同）、モーゼの像（ミケランジェロ作、同）、ジュリアノ・メディチ廟の「夜」（同、同）、本館玄関前の老権の木、本館玄関の墓股、本校第一食堂入口の釣鐘、校友会弓道部、茶道部、尺八部編集委員（松村礼一、米田重博、石山彰、石塚軍治）による編集

後記には、編集の概要とともに「吾々が今回の特輯號編輯に際して感じたことは第一に本校創立の偉才、天心岡倉覺三先生の深遠なる意圖であると共に、第二には名實共に日本に於ける官立の美術學校の眞價の程であつた。」「岡倉天心先生の雄大而悲壯なる美術的經綸を一瞬も忘却してはならないのである。」云々と、天心再認識の呼びかけが記されている。なお、編集後記によれば、同一方針による続刊が予定されていたが、打ち切られた。それは後述のように東京美術學校報国団結のため校友会が解散したこと、もう一つは昭和十五年秋に文部省が「學校關係出版物ノ印刷用紙節約ニ関スル件」の指示を下し、学内出版物の全面的廢合整理と特に雜誌の廢合を促したことに原因があつた。この指示は雜誌の全面廢止を命じたものではない。にも拘らず本校唯一の雜誌、伝統ある機関誌まで廢止してしまつたのは、当局者の認識不足によるものと言わねばならない。非常時下、生徒や卒業生が続々と戦場に送り出されて行く時代であればなおさらのこと、彼らの学生生活や活動の片鱗なりとも記録に留め、或いは彼らを励まし、或いは慰めるのが学校当局者の任務であつた筈だからである。翌十六年にかろうじて発行された『東京美術學校報国団報』は極めて貧弱で、校友会機関誌の伝統を継ぐものではなかつた。

⑫ 高村豊周の海外出張

昭和十五年十一月七日、教授高村豊周はアメリカ合衆国および中部アメリカ諸国へ十一月上旬から五ヶ月間の出張を命ぜられた。出張上申書（「昭和十五年 職員関係書類 庶務掛」）には出張目的が

次のように記されている。

本校工藝科教授參考資料ニ供スル為豫テヨリ歐米各國ニ於ケル工藝界ノ現状ヲ調査研究セシメ度考慮中ノ處今般商工省ヨリ同教授ニ對シ亞米利加合衆國及中部亞米利加諸國ニ於ケル工藝事情調査方囑託シ来リタルヲ以テ右應囑セシメ序ヲ以テ上述ノ調査研究ヲナサシムルニアリ

豊周の回想によるとこの出張は商工省が計画していたメキシコにおける日本の工芸展覽会のための下調べが主な目的だった。その十月にはアメリカは日本に屑鉄の輸出を禁止、戦争の匂いがはじめていたので、和田三造に「この時勢に行つたつてどうせ勉強など出来やしないから、やめた方がいい。帰れなくなるぞ」と心配されたが、メキシコという国土に妙に興味を感じて思い切つて出かけたという。

昭和十五年十二月十八日に竜田丸に乗つて出発した。翌十六年一月一日、サンフランシスコに入港し、三日にロスアンゼルスに上陸、その後ニューヨーク等を回つた。ロスアンゼルスでは一週間ばかり日本の出稼労働者の中に入つて一緒に生活したという。二月にはメキシコ市に入り、ガタラハラ市で近くのトラケペックの棕櫚の唐草模様の焼物を、プエブラではコバルトブルーの焼物やガラスを、オハカ市ではインディアンンの土俗品、素焼きの焼物やレボツオという染織を持寄る市場を見た。また、ウルアパン、オリナラで漆に似たラッカーを、タスコで銀細工を見て、タンピコ、ソチミル